

<p>15日 (日)</p> <p>民数記 34章</p>	<p>「これは、あなたたちがくじを引いて、嗣業として受け継ぐべき土地である」(13節)。イスラエルの人々が与えられた土地の境界線が示された箇所。残念ながら、この境界線を「神のことば」として絶対化する信仰が現在そこに住んでいるパレスチナの人々を敵視し争いを生んでいる。「神のことば」は主イエスが体現された「平和」にこそ示されていることを覚えたい。</p>
<p>16日 (月)</p> <p>民数記 35章</p>	<p>「これら六つの町は、イスラエルの人々とそのもとにいる寄留者と滞在者のための逃れの町であって、過って人を殺した者はだれでもそこに逃れることができる」(15節)。私たちは完全ではない。常に過ちを犯す危険をかかえている者。そんな私たちのために神は「逃れの町」を用意された。神は私たちの罪を正しく裁きつつ、憐れみと赦しで包んでくださる方。</p>
<p>17日 (火)</p> <p>民数記 36章</p>	<p>「イスラエルの人々の諸部族はそれぞれ、自分の嗣業の土地を固く守ることができよう」(9節)。イスラエルの人々にとって土地は、自分で獲得し、自由に売り買いできるものではなく、神から与えられた「嗣業(しぎょう)」だった。「嗣業」は代々大切に受け継ぎ、手渡していくもの。さて、私に神が与えてくださり、決して売り渡してはいけない「嗣業」は何だろう？</p>
<p>18日 (水)</p> <p>申命記 1章</p>	<p>「裁判に当たって、偏り見ることがあってはならない。身分の上下を問わず、等しく事情を聞くべきである。人の顔色をうかがってはならない。裁判は神に属することだからである」(17節)。モーセを悩ませたのは日々民の間に起こる争いごとだった。私たちを正しく裁くのは人の知恵ではなく神の正義と愛である。神を畏れ、神の前にひれ伏す信仰をいただいて。</p>

<p>19日 (木)</p> <p>申命記 2章</p>	<p>「あなたの神、主は、あなたの手の業をすべて祝福し、この広大な荒れ野の旅路を守り、この四十年の間、あなたの神、主はあなたと共におられたので、あなたは何一つ不足しなかった」(7節)。四十年の荒れ野の旅は、人々のつぶやきと不平不満に満ちていたにもかかわらず、神はイスラエルを見捨てず共に歩んでくださった。その慈しみは今日も変わらない。</p>
<p>20日 (金)</p> <p>申命記 3章</p>	<p>「もうよい、この事を二度と口にしてはならない。…お前はここのヨルダン川を渡って行けないのだから…ヨシュアを任務に就け、彼を力づけ、励ましなさい」(26-28節)。モーセは約束の地カナンに入りたいと願ったが、神の計画は違った。願いと祈りは違う。祈りは、神が私に向けて語る言葉を聴くこと。大いに願ってもいいが、それ以上に「祈る者」とされたい。</p>
<p>21日 (土)</p> <p>申命記 4章</p>	<p>「あなたの神、主は憐れみ深い神であり、あなたを見捨てることも滅ぼすことも、…契約を忘れられることもない」(31節)。神の契約は、弱く貧しい民イスラエルに対する慈しみの契約。それゆえイスラエルが自らの弱さと貧しさを忘れた時、神の慈しみと憐れみが見えなくなる。どんな時も私たちの足を洗い続けてくださる主イエスの愛を見失うことがないように。</p>
<p>22日 (日)</p> <p>申命記 5章</p>	<p>「主はこの契約を我々の先祖と結ばれたのではなく、今ここに生きている我々すべてと結ばれた」(3節)。イスラエルと結んだ契約は、今を生きる私たちにも同じように受け継がれている。十の戒めを通して、私たちに、神さまから命を与えられた「人」として生きることを示してくださる。命の主である神さまの祝福の内に、今週も歩みたい。</p>